

発題要旨 ブレイクとワイルド

江 河 徹

(フェリス女学院大学教授)

人間の五官の感覚 (senses) が人間の魂 (soul) にとって大切なものであることを強調した点で、ウィリアム・ブレイク (1757-1827) とオスカー・ワイルド (1854-1900) とはきわめて近接した地点に立っていたように思われる。前者が18世紀末、後者が19世紀末にそれぞれの壮年期を過していることに一因があるかもしれない。世紀末はなによりも感性の解放を求める力が強く働く時代だからであろう。ブレイクの『天国と地獄の結婚』(1790) とワイルドの『ドリアン・グレイの画像』(1890)とは、正確に一世紀を隔てて発表されていながら、感性の解放を求める意識の強さには時の経過を感じさせない共通性がある。

例えば、『ドリアン・グレイの画像』の第二章に次のような場面がある。ライラックの花の中に顔を埋めて、その香りを酒でも飲むかのように吸っているドリアンの傍にヘンリー卿が近づいてきてこう言う――

“You are quite right to do that ... Nothing can cure the soul but the senses, just as nothing can cure the senses but the soul.”

「君がしていることは全く正しい…五官の感覚だけが魂を癒すことができるのだ。ちょうど、魂だけが五官の感覚を癒すことができるように。」

作者はこの命題をもう一度繰返すように次のようにも書いている。

“Yes,” “that is one of the great secrets of life—to cure the soul by means of the senses, and the senses by means of the soul.”

「それこそ人生の大いなる秘密の一つだ――五官の感覚によって魂を癒し、魂によって五官の感覚を癒すこと。」

さてブレイクの方とは言えば、『天国と地獄の結婚』の冒頭部分に「悪魔の声」と称する算所があって、悪魔が次のように主張している――

1. 人間は魂 (soul) と区別されるような肉体 (body) を持っているわけではなく、肉

体とは五官の感覚 (five senses) によって識別される魂の一部であって、現代においては、五官の感覚は魂の主な入り口なのである。

2. エネルギー (energy)こそ唯一の生命であって、エネルギーは肉体から生じる。そして理性 (reason) はエネルギーの限界もしくは境界線にすぎない。
3. エネルギーこそ永遠の飲みである。

理性よりも感性に重きを置く姿勢が、上記のごとく、両者に共通しているが、そればかりではない。「悪魔の声」という設定からも明らかなように、ブレイクは反社会的なペルソナを介して感性を謳歌しているのは、無垢な青年ドリアンを誘惑するヘンリー卿の反社会性と軌を一にしている。図式化してみると、ブレイクにとっての「天国」とは、理性であり、抑圧であり、社会的には秩序と体制の側に属するのに対して、「地獄」とは、感性であり、想像力であり、生命力であって、社会的には反秩序・反体制の側に属している。これに『ドリアン・グレイの画像』の構造を重ね合わせてみると、「天国」の側には画家バジルが配され、「地獄」の側には言うまでもなくヘンリー卿が位置づけられよう。ヘンリー卿は無垢なるドリアンを誘惑するエデンの園の蛇であり、サタンである。

ブレイクとワイルドの親近性は、『天国と地獄の結婚』と『ドリアン・グレイの画像』における感性謳歌の域にとどまるものではない。キリストに対する熱烈とも言うべきオマージュぶりにおいて、両者はきわめて類似した心性の持ち主たちである。それも、どこかの教会に属して、信者としてのつとめに励む熱心なクリスチャンだったというわけではなく、むしろ教会の定める教義や信条に一切捉われないことなく、それぞれが心に思い描いたキリストを熱愛している点で、同質とも言えるほどである。ブレイクの『永遠の福音』と、ワイルドの『獄中記』を読み比べてみたならば、その同質性に驚かされるだろう。

